

小国が生んだ画僧松田黄峰

高橋 実

まつだこうほう

松田黄峰は小国の生んだ江戸時代末の僧侶で、画家であった。黄峰の絵は山水画と言われるもので、自然を題材とした東洋絵画の一部門で人物画・花鳥画とともに東洋絵画の三大部門で、一般的には風景画の意味に解釈されますが、高い精神性が要求されます。大自然を意味する山水は道教思想、陰陽五行説などを背景として画題として取上げられました。

黄峰は江戸時代末の安永二年（1773）の生まれで。天保六年（1835）六四歳で亡くなりました。法坂の山崎七左衛門家（現当主山崎達也氏）に生まれたのですが、松田作右衛門家（現当主松田誠氏）に子供がなかったので、望まれて養子に入りました。ところが、皮肉なことに作左衛門家に実子が生まれ、黄峰は六歳の時出家させられたといわれています。そして、現在の十日町市の新保広大寺の仏庵和尚の弟子となったのです。小さい時から絵が好きで、先師に叱られて涙を流すこともありましたが、その涙で蘭の絵を描いたといわれます。先師は黄峰の絵の才能を信じて、その好みに応じようとしたといわれます。それからは好きなように絵を描いてもよいが、仏事も怠るなと言われたということです。そして広大寺十九代の住職になりました。黄峰はその僧職に安んずることなく、絵の道を究めるため、こんどは大阪に旅立ち、二十七歳で大阪吹田市玉林寺となったといわれます。一説に小松村久昌院に移り禅を修めたともいわれます。傍ら、その余暇を画人として名を成していた紀州和歌山の野呂介石の門を叩き教えを請いました。野呂介石は、南画の大家で、黄峰もその影響を受けることになったのです。南画とは、南宗画を中心とした元、明、清の中国絵画の影響を受け、日本で江戸時代中期以降に興った絵画のことで、文人画ともいわれますが、職業的画家も含まれる点で厳密には中国の南宗画、文人画とは性格を異にします。黄峰が野呂介石からどのようなことを学んだか、それを表す資料はありませんが、介石の弟子が書いた本に黄峰がはじめて介石を訪れたことが書かれており、それによると黄峰は介石に中国から渡来した唐墨を送ろうとしましたが、介石はもっと上等な唐墨を持っていて、恥ずかしくて贈れなかったことが書かれています。

いみな

黄峰の諱（別号）は道淳、巴山・素庵・如雲・少林ともいわれています。当時天下に名をはせて居た岡田米山人・岡田半江・頼山陽なども交流して画論を闘わし、少しもひけ

松田黄峰展図録

をとることがなかったということです。それでも多くの人に知られなかったのは、人と交わりを絶ち、独自の道を歩んだためです。晩年は大阪上中島小松村久昌院に居を定めました。後になって同じ小国上岩田の渡辺芝谷は黄峰を慕い、「追遠集」を編んだりして多くの人に知られるようになりました。

さて、山水画ですから、一般的には山や滝の絵が多いのですが、黄峰の絵を見ると実在した滝以外描かず、観る人の興味を引くための作画を戒めたということです。その脇に漢詩がしたためられてあります。黄峰は画だけでなく、儒家として書家として相当高い学識を持った知識階級だったのです。より高い文芸性を得るために、高尚な人間性が求められ、「詩書画一致」という思想の根幹を黄峰は身に付けていたのです。

黄峰が持ち歩いていた文書を読みやすくしてみると

私は曹洞宗の僧侶ですが、もともと生まれた国も、両親も、兄弟も、弟子もありません。世間とかかわりあいもなく、山水を求めて諸国を放浪している身です。もし途中で命が尽きることがあったら、その土地の作法で片づけてください。ただ荷物の中に少しばかりのお金が用意してあります。これで始末してください。墓は自然石で、死亡年月日と「越僧黄峰墓」とのみ記してください。諸国の御役人様

と書かれた遺書を懐にしていました。

後になって生家の松田作太夫氏や叔父にあたる前県議の山崎徳三郎氏がその事績を集め、大阪玉林寺を訪ねて、書画の蒐集に努めました。

黄峰死後八十年たって大正六年その遺徳をしのんで黄峰の墓が法坂集落の裏手の公園に建てられました。それは黄峰の遺書通り自然石に「越僧黄峰墓」のみ記されています。その除幕式の写真には、当時の小国郷の有力者の顔が見え、黄峰の人徳が小国の七ヶ村の結びつきを強めることにつながっていたと思われれます。そして碑が立って百年後の今回その功績を後に残すため、法坂集落の有志ででは松田黄峰顕彰会を結成し、作品を展示して遺徳をしのぶことになりました。

平成二十九年十月十五日法坂ふれあい館で開催され、岡村鉄琴此（新潟大学教授）が作品解説をしました。